

2006 年度アメリカの大学との共同授業を振り返って

早瀬 光秋*、永田 成文**、荒尾 浩子***

I. ミシガン大学との遠隔授業を振り返って

1. はじめに

2005 年度ⁱに引き続き 2006 年度も後期にミシガン大学と遠隔授業を 6 回実施した。またそれに先立ち関係者の自由遠隔会議を 1 回行った。これらについて報告し考察を加えたい。

2. 行なわれた遠隔授業と遠隔会議

今年度行われた遠隔授業と遠隔会議は次の通りである。すべて午前 8:50~10:20 (日本時間) で行われた。

自由遠隔会議： 7 月 14 日 (金)
第 1 回目授業： 11 月 15 日 (水)
第 2 回目授業： 11 月 29 日 (水)
第 3 回目授業： 12 月 6 日 (水)
第 4 回目授業： 1 月 10 日 (水)
第 5 回目授業： 1 月 17 日 (水)
第 6 回目授業： 1 月 31 日 (水)
Skype による反省会： 2 月 8 日 (木)

2.1 自由遠隔会議

ミシガン大学と三重大学との間における今後の遠隔授業の可能性を探るために、双方の大学におけるポリコムⁱⁱ利用に興味を持つ教員、行政職員、技術担当者が集まり自由に意見交換をした。会議の前に両大学でメーリングリスト等を活用して広報活動をした。

ミシガン大学側からは、日本学センターの Jane Ozanich 氏、技術担当者の John Stewart 氏が参加した。ミシガン大学ではすでに夏期休暇に入っていたため教員の参加がなかったのが残念であった。三重大学側からは国際交流センターより、花見楨子教授 (異文

化間教育)と藤田昌志教授 (日本語教育)が参加した。教育学部からは、永田成文助教授 (社会科教育)、荒尾浩子助教授 (英語教育)、早瀬 (英語教育)、そして Edgardo Mendez 氏 (ベネズエラ国中等学校英語教師 (2005-2006 年度文部省教員研修留学生)) が参加した。

会議ではまず、音声や映像がとてもクリアであることを確認しあい、双方の興味とか授業目標が一致すればポリコム利用の遠隔授業が今後も大いに可能であることを認識した。また、今後国際交流センターの藤田教授等がミシガン大学の日本語教員と連絡を取り、話し合いを進展させることになった。永田助教授は、以前に日本とオーストラリアの高校間の遠隔授業を実践した経験があり、何らかのかたちで遠隔授業に参加することになった。また、後期に早瀬の英作文クラスで 5~6 回の遠隔授業を行うことで双方が合意した。図-1, 2 で会議の様子を示す。



図-1 日本側参加者

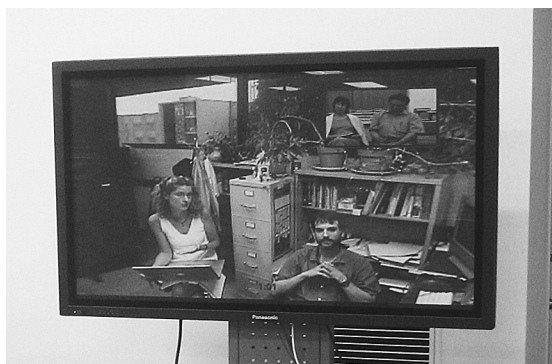


図-2 ミシガンからの映像

* 三重大学教育学部英語科 (Part I の 1~2.7 及び 2.9~2.10 担当)

** 三重大学教育学部社会科学科 (Part I の 2.8 担当)

*** 三重大学教育学部英語科 (Part II 担当)

2.2 遠隔授業を始める前に

第一回目の遠隔授業を始める前に、Ozanich 氏、Stewart 氏及び早瀬がメールで綿密な打ち合わせをした。まず、昨年と同様、毎回の遠隔授業の構成を次のようにした。前半では早瀬の「英作文Ⅳ」（共通教育解放科目としては「英語Ⅲ 英作文」）を受講している学生9名が、それぞれ5分の持ち時間で、自分の作成している日米文化に関する小論文のテーマに関して、その日にフォーカスしたいサブテーマについて説明した後ミシガン大学生から質問を受け、後半はミシガン大学生が自分の興味に基づいて様々な質問をするというものである。ミシガン大学生については、受講している日本語の授業とは切り離して、希望者のみが参加することとした。すなわち、夜の7時まで待っても参加をしたい、いわば熱心な学生ばかりであるが、毎回同じ学生が参加するとは限らなかった。ミシガン大学の各種レベルの日本語クラスから参加者があった。そして遠隔授業中、三重大生は英語を、ミシガン大学生は日本語を使用することとした。

なお、三重大生9名の小論文テーマは次の通りであった。

The Parent-Child Relationship in Japan and the U.S.

Japanese Foods in the U.S. and American Foods in Japan

Breakfast and Lunch in Japan and the U.S.

Home Education in Japan and the U.S.

American Movies in Japan and Japanese Movies in the U.S.

College Life in Japan and the U.S.

Volunteer Work in Japan and the U.S.

Fashion among Young People in Japan and the U.S.

Christmas in Japan and the U.S.

テーマ設定に関して昨年度の反省から、アメリカ人学生も興味のあるテーマを選ぶべく、2学期開始早々（10月の中旬）に最初の遠隔授業を行う予定であった。その遠隔授業で三重大生が一人複数のテーマを提示し、アメリカ人学生の意見を聞きながら最終テーマを決定しなかったのである。しかしながら、三重大の遠隔授業を行う部屋の予約が出来ず、最初の遠隔授業が11月15日となったため、その時にはすでに上のようなテーマが決定済みであった。

また、遠隔授業に先立ち、各三重大生がインターネット上に次のような自己紹介を顔写真付きで載せた。

My name is ---. I am 20-years old. I major in

English education. I want to be an English teacher in the future. So I work in a cram school and teach English to junior high school students. I also teach track and field to elementary school students as a volunteer. Because I really like children, I enjoy teaching them very much. I belonged to the track and field club until high school. I ran the 400-meter hurdles. Now I don't belong to any club, but I play basketball with my friends on Saturdays. Basketball is a lot of fun for me. My favorite foods are chocolate and strawberries. I love ice cream too. My favorite actor is Johnny Depp. I like his movie "Pirates of the Caribbean". I like animals, especially cats. I have a pretty cat. His name is Musashi. It's a name of a Japanese famous samurai. I like going abroad. I enjoyed a homestay program in Australia last spring. Then I felt that I want to communicate with more people in English. So I want to go to the USA next. I am really happy to have a contact with you. I'm looking forward to meeting you in the video conference.

さらに、9名のメールアドレスをミシガン大学に知らせ、三重大生に連絡ができるようにした。ミシガン大学からは、遠隔授業開始後、参加学生のメールアドレスが知らされてきた。学期中、遠隔授業の内容についてさらにメールで意見交換をした学生が多く見られた。

2.3 第1回遠隔授業（11月15日）

三重大からは8人、ミシガン大学からは5人の学生が参加した。司会担当の早瀬が遠隔授業の目的を簡潔に説明した後、時間節約のため学生たちは名前、学年、専攻分野のみの自己紹介を行った。この自己紹介は全ての遠隔授業で踏襲した（前述のようにミシガン大学の学生が毎回変わるので毎回自己紹介が必要）。

前半三重大生の発表部分でまず、気付いたのは、ほとんどの者が自分のサブテーマについて短時間ながらも丁寧に説明した中で、簡単に終わらせた者がいたことである。また、この現象はその後の早瀬からの注意にも関わらず5回目の遠隔授業まで続いたのは残念であった。通常の授業にも見られるように予習を十分にしないで臨んだ結果である。しかしながら、絵や統計結果を効果的に使う学生もいたことは評価できる。質疑応答では、"Do you know it?" "Was it interesting?" "Are they popular?" といった一般的な質問があった

が、"Why?" や "How?" を使って深く探ることが必要であろう。反面、事前に調査したこと（たとえばアメリカの baby shower 等）に基づいてさらに質問していたのは良かった。Red Cross についてアメリカ側の説明があったとき、進んでこちらから日本の説明をする者がいなかった。また、アメリカでは伝統的に会社でもクリスマスパーティーがあることを聞き出し、さらに調査する材料を得た者もいた。

後半の部では、アメリカ人の学生から、「日本ではどんなアメリカの音楽が人気か。」というような一般的な質問もあったが、「メジャーリーグに優秀な日本人選手が来ることをどう思うか?」という興味深い質問もあった。

全体としては、緊張する第 1 回目としては合格の出来であったと思われる。Ozanich 氏の次の感想に同様のことを述べている。

From my standpoint, I felt as though last night's video conference was very successful. I was pleased to see how active the students were and how much they talked. I liked that we got the introductions out of the way quickly and then left the rest of the conference up to the students and we sat back and let them discuss their topics. The students seemed pleased with this as well as there were very few lulls in the conversation. The Mie University students' preparation of their topics was impressive. They were all very clear and succinct. I think that I speak for everyone on this side that we all liked that some of them had images to share as they helped the U-M students understand more of what they were saying. The U-M students' ability and enthusiasm for speaking in Japanese was also very impressive. It was great to see how they were working as a group to ask and answer questions.



図-3 三重大側（手前がポリコム本体）



図-4 ミシガン大学側

両方の大学の様子を図-3, 4 で示す。

2.4 第2回遠隔授業（11月29日）

三重大大学からは9人、ミシガン大学からは5人の学生が参加した。今回司会の Ozanich 氏の提案により前半は全員が英語で、後半は全員が日本語で行うことになり、これもその後5回目まで踏襲された。前半の三重大生の発表内容が、アメリカ人の日本語力より高度なため、日本語では十分な返答ができない、という理由からである。その結果、アメリカ人からの情報は大きく増えることになった。反面、英語が速すぎ理解が難しいと感じる日本人学生も1, 2名いることになった。

今回良かった点は次のようである。

- (1) 前回出席した三重大生のほとんどが経験を生かし、自分の発表を十分に準備して臨んだ。
- (2) その結果、ミシガン大生から、各々が書き進めている小論文に使える情報を前回に比べて引き出した。
- (3) ミシガン大学生の英語が分からなかったとき、相手側に「繰り返し」や「言い換え」を三重大生が求めることがあった。これは「コミュニケーション方略」と呼ばれるもので、言語習得を促す要因となる。
- (4) 「沈黙の時間」が少なく、全体としてスムーズに進行した。

課題として残った点は次のようである。

- (1) 今回も "Do you like Japanese food?" "Can you eat raw fish?" "Do you like Japanese animation?" という基本的で一般的な質問が発せられた。三重大生の更なる周到な準備が求められる。
- (2) 三重大生が9人おり、一人が質疑応答も含め5分という決まりであったが、結果的に後半の日本語だけの部が20分になってしまった。これは司会の Ozanich 氏が三重大生に多く語らせる、三重大生の質問にアメリカ人の学生に丁寧に答えさせることに

したからである。これにより英語の部はじっくりと討論できたが、日本語の部の時間が少なくなってしまった。次回は時間配分を徹底する必要がある。

- (3) (英語の部が長かったこともあり)、三重大生の中には、相手の英語の理解が困難と思われる者もいた。このことをミシガン大学生も気付いたようである。理解出来ないときは「繰り返し」等を求めれば良いが、三重大生一人の時間が5分と限られているので、これは難しい問題である。次回はミシガン大生に、できるかぎりゆっくり、そしてはっきりと発言してもらうことにする。

次の写真(図-7, 8)は、学生が説明に使用した三



図-7 三重大学食(その1)



図-8 三重大学食(その2)

重大学の学生食堂の写真である。アメリカの大学の学生食堂と異なる、日本の大学の学生食堂の様子が一目瞭然である。

2.5 第3回遠隔授業(12月6日)

三重大学からは8人、ミシガン大学からは6人の学生が参加した。

遠隔授業も3回目となり、教師の学生に対する要求度もどうしても高くなる。その面から言うと、"Cereals

are not healthy." とアメリカ人学生に言われても "In what way?" と聞き返せないこと、"Most people eat Christmas cake in Japan." というだけで終わり、日本のクリスマスケーキがアメリカのそれとどのように異なるかを説明しないこと、日米の学生は両方とも "parties" をすることは理解できても、日米の相違まで踏み込まないこと、等が気になった。また、アメリカ人の英語の説明を聞きながら素早くメモを取ることは、英語を理解することと同じく難しく、急には解決できない課題である。しかしながら、そのようなことを経験することが英語学習の動機付けにつながるとと思われる。

前回の経験を生かし、日本語の時間を25分取ることが出来たのは良かった。司会者の Stewart 氏が、三重大生の時間を出来る限り1人5分に限ったお陰である。

又、今回は通常のメディアホールではなく、図書館会議室で行った様子を示すものである。場所とIPアドレスを変えたため、本来ならば前もって通信実験をミシガン大学側とすべきであったが、その時間が取れず当日まで不安が残ったが、一度のコールで繋がった。これもポリコムの性能の良さを表すものである。また、今回はテレビ画面だけではなくプロジェクターを通してスクリーンにも映像を映した。図の9と10を参照されたい。



図-9 図書館会議室(その1)

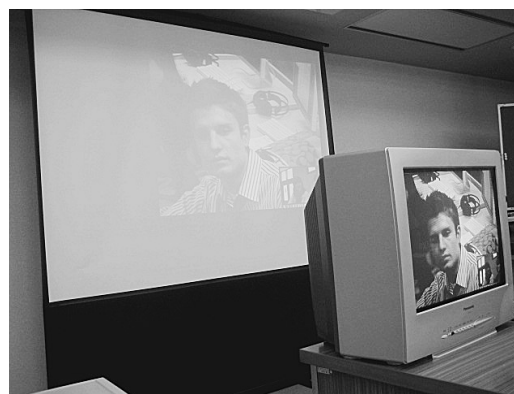


図-10 図書館会議室(その2)

2.6 第4回遠隔授業（1月10日）

三重大大学からは6人、ミシガン大学からは8人の学生が参加した。

三重大生の準備が十分になされていたのは良かった点であるが、そのため、学生によっては自分の作文をそのまま読んでいたことがあったのは残念であった。一方、ミシガン大学生の中には、日本語の部において、前もって準備したメモを見ながら質問をする者もいて熱心さを感じた。「和製英語はどのように作られますか。」「大学ではいつまでに専攻を決めなければいけませんか。」「英語の勉強のどういうところが難しいですか。」「日本食を食べる時の大切なマナーは何ですか。」等の興味深い質問がなされた。

なお、次は Ozanich 氏と Stewart 氏からの感想である。学生も遠隔授業に慣れてきて、遠隔授業が円滑に行なわれてことに関しての賛辞もある。文中の M と A は三重大生を指す。

.... the conference went very well. Jan and I were commenting afterward that this year seems to be flowing much better than last year. I think it helps that the students are able to split the communication between Japanese and English. That helps make it more natural... I was very impressed by M and A's introductions to their topics and questions. They were smooth and very natural-sounding. It is good to see the students' English progressing and their ease in front of the camera expanding.

2.7 第5回遠隔授業（1月17日）

三重大大学からは9人、ミシガン大学からは6人の学生が参加した。

ミシガン大生6人のうち5人は前回も参加した学生で、彼らが遠隔授業に興味を持っていることが分かる。三重大生の各小論文についての最後の遠隔授業であった。三重大から9人が全員参加したこともあり、また、三重大生からの質問に6人のミシガン大生全員が答えたこともあって、前半の英語の部に時間が取られ、後半の日本語の部が20分弱になってしまったことは残念であった。

2.8 第6回遠隔授業（1月31日）

2.8.1 英語科学生と社会科学学生の協同による地球の課題の考察

今回の Videoconference（以後 VC と表記）には、「英作文Ⅳ」を受講する学生（以後英語科学生と表記）

と「地理歴史科教育法」を受講する学生（以後社会科学学生と表記）が参加した。高等学校地理教育では、異文化理解と地球的課題の内容が重視されている。また、英語科教育では、異文化理解の内容が重視され、テキストには他国の文化や地球的課題に関わる文章が紹介されている。このように英語科と社会科学には共通領域が存在する。今回の VC は英語科学生と社会科学学生の協同学習であり、より内容的側面を重視し、コミュニケーション能力の育成と同時に思考力の育成を目指した。よって VC を、異文化や地球的課題について調べ、考えたことについて、諸外国の学生と意見交換し、よりグローバルに考察する場ととらえた。

エネルギー経済統計年間（2006年版）では、アメリカは CO₂ 排出量、1人当たりの排出量がともに世界一となっている。国際的な地球温暖化対策として、日本は京都議定書を批准しているがアメリカは離脱している、地球温暖化対策の1つとして、日本はサマータイムを導入していないがアメリカは導入している。これらのことに着目し、今回の VC では、地球的課題である地球温暖化をトピックとし、その対策としてのサマータイム制度の導入をテーマとして意見交換することを三重大側から提案した。

ミシガン大学側はミシガン大学レジデンシャルカレッジ日本語集中講座担当の佐藤哲也氏、三重大大学側は永田が窓口となり、ミシガン大生9名（初中級日本語の授業）と三重大生17名（英語科学生9名、社会科学学生8名）が参加した。VC では、社会科学学生が主に対応し、英語科学生が補助する形をとった。社会科学学生の立場からは、使用言語はすべて日本語でもよかったが、ミシガン大学側は、日本語を勉強し始めて1年程度の学生が多く、協議の結果、ディベート部分は英語で、自己紹介や質疑等は日本語で行うことになった。また、VC の流れは次のように決定した。

- (1) 自己紹介（名前、学年、専門／専攻）ミシガン大生は日本語、三重大生は英語 [10分]
- (2) ミシガン大側による地球温暖化とサマータイムに関する発表（日本語）[15分]
- (3) 三重大側による地球温暖化とサマータイムに関する発表（日本語）[5分]
サマータイム制度に関するディベート披露（英語＋資料）[15分]
- (4) 三重大生のディベート内容に対するミシガン大生のコメント（日本語・英語）[5分]
- (5) 地球温暖化やサマータイムに関する質疑応答（日本語・英語）[30分]

社会科学学生は、VC までに地球温暖化やサマータイム制度についての講義を受け、論題「日本は、地球温暖化防止のために、サマータイム制度を導入すべきである。」について、賛成側と反対側にわかれ、それぞれの立場からディベートに必要となる資料を集めた。日本語と英語のディベートの原稿と資料を作成し、日本語でプレディベートを行い、内容を修正した。VC の一週間前に、VC に参加する 8 名の社会科学学生と英語科学学生が地球温暖化やサマータイム制度の情報を共有し、協力して英語のディベートの原稿と資料を再考した。

2. 8. 2 VC の様子

ミシガン大側による地球温暖化とサマータイムに関する発表は、9 名の学生が夏時間のよい点、よくない点、アメリカはどうして京都議定書に批准していないかの 3 点について簡単にコメントし、日本の学生へ質問をした。ミシガン大生は、日本語の用紙を手持って発表した。三重大生は自分たちの考えと比較しながら応答していた。次に、その概要を示す（以後、日本語使用の場合は（日）、英語使用の場合は（英）と表記）。

夏時間の良い点（日）：休みの期間は遅く起きて節電できる。夕方明るいので電気は使わない。遅くまでスポーツができる。

夏時間の悪い点（日）：時間が変わると分からなくなる。朝が暗くて登校時に危ない。夕方にエアコンを使う。朝が暗いのに起きるのが大変。日が長くなるので夜遅くまで起きるため電気やエアコンを使う。

京都議定書批准（日）：政治家は不公平だと思っている。発展途上国の削減規定がない。しかし、これらはアメリカ人全ての意見ではない。

日本側へ質問：Q1. 地球温暖化について考えたことがありますか（日）？

A1. 普段はあまり考えません（日）。

→私も（日）。

A2. 買い物にエコバックを持って行きます（英）。→それ何ですか（英）。

Q2. 誰が地球温暖化について毎日考え

ていると思いますか（日）？

A1. 一人ひとりが節電とかをやっている（日）。

A2. 日本の代表として安部首相が考えている（日）。

Q3. 地球温暖化を信じますか（日）？

A1. 信じます（日）。

A2. ニュースとかでみて本当だと思う（日）。

Q4. 資源がなくなったらどうしましょう（日）？

A1. ライフスタイルの変化（英）。

三重大側による地球温暖化とサマータイムに関する発表は、永田が日本語を交えながら行った。教材提示装置により 8 枚のスライド（図 11 を参照）をスクリーンに映し、地球温暖化対策の緊急性とサマータイム制度の導入、社会科学学生が行うディベートの流れについて説明した。

サマータイム制度に関するディベートの主な内容を次に示す。

賛成側立論：CO₂ 削減（エアコン・照明の使用減少）
：経済効果（余暇の時間増加による消費拡大）

：安全の向上（犯罪・交通事故防止の効果）

：世論（5 割以上が賛成）[資料提示]

反対側尋問：睡眠障害についてどう思っているのか。

：賛成派の国民はサマータイムでかかる費用を知っているのか。

反対側立論：世論（政府は賛成側の意見を強調しすぎ）
[資料提示]

：健康障害（睡眠不足・生活リズム変化）

：制度廃止国（実施して廃止した地域、戦後日本）

：費用と効果（約千億円かかるが削減目標の 1%に満たない、他の取り組み）

賛成側尋問：いつ日本ではサマータイム制が導入されたのか。

：実際に家庭の努力で CO₂ は減少しているのか。

この後、最終反駁を経て、ミシガン大生に賛成側と反対側のどちら側の論が筋道が立っていたのかをジャッジしてもらった。これは、ミシガン大生の参加を促すだけでなく、三重大生も大変興味を示していた。結果

は賛成側支持が5人、反対側支持が4人であった。三重大生はどのようなコメントがもらえるのかを期待し、質問には簡単な英語で返答した。ディベート内容に対するミシガン大生のコメントは、次のようなものであった。

Significance of the topic

○Global warming by human activities is one of the most serious problems in the 21st Century.

Global warming will bring disaster to the world.

- Sea level rise (31-49cm)
- Flood and draught
- Reduction of agricultural products
- Expansion of tropical disease



Flood in Tuvalu

Significance of the topic

○Topic : Global warming

JAPAN: Ratify the Kyoto Protocol.

USA : Don't Ratify the Kyoto Protocol

○ Theme : Introduction of daylight savings time

JAPAN: Not introduced.

USA : Already introduced

The rules of the debate

○The same opportunities will be given to both team.

4mn: Keynote argument of the supporting team

2mn: Question from the opposing team

4mn: Keynote argument of the opposing team

2mn: Question from the supporting team

2mn: Final argument of the opposing team

2mn: Final argument of the supporting team

The members of the teams

The supporting team	The opposing team
Tomoko(ともこ)	Masahiro(まさひろ)
Yasuhiro(やすひろ)	Masato(まさと)
Tasuku(たすく)	Mami(まみ)
Kiwamu(きわむ)	Youji(ようじ)



Let's Start!



○反対側のエアコンを使う論はとってもよかった。

私はエアコンの節約になって思っていたのですが、そうではないことが分かりました(英)。

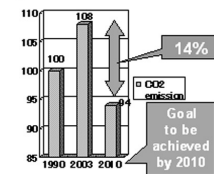
○賛成・反対から議論されて良かったのですが、どのような資料を使ったのか(英)?

○サマータイム制度は一時間変えるだけですがどの

Significance of the topic

○We proposed the topic of daylight savings time, because it may contribute to reducing CO2 emissions in Japan.

Japan have to reduce 14% of CO2 emission by 2010, based on Kyoto Protocol.



Definition of the theme

“Should Japan introduce daylight savings time for global warming prevention?”

Japan = The Japanese government

Introduce = enact a law

Daylight savings time = to advance the time by one hour, from the last Sunday of March to the last Sunday of October.

After the debate

○ We would like to ask the American students to be the referees of the debate.

○ We would like to welcome questions and comments from the American students.

Judgment to the debate

We would like to ask American students to judge which team won in the debate.

If you think the supporting team won, please raise your right hand.

If you think the opposing team won, please raise your left hand.

ような効果がありますか（英）？

地球温暖化やサマータイムに関する質疑応答は、三重大生からの質疑をミシガン大生が応答する形式になった。この質疑応答は英語科学生が中心となった。また、社会科学学生の日本語による質問が通じない場合、英語科学生が協力した。1つの質問に対して複数のミシガン大生が競って答えたり、ミシガン大生同士で話し合って答えたり、笑いが出るなどリラックスした雰囲気となった。温暖化の危機という両国共通の思いについては、出身地の事例を引き合いに出すなど特に力が入った。

サマータイム制度導入国の学生の言葉には説得力があり、質疑応答により日本側のみで考えてきたサマータイム制度についての考察を深めることができた。また、既にサマータイム制度が導入されているアメリカと、今から導入しようとする日本では、サマータイム制度についてのとらえ方が異なることを確認できた。質疑応答の概要は次の通りである。

Q1. サマータイムによる夕方の明るい時間に何をしますか（英）？

A 複. スイミング等複数（英）。

Q2. サマータイムによりどんなことが不都合ですか（英）？

A 複. 導入時の時間調節、導入後2～3日慣れるのにつらい等複数（英）。

Q3. サマータイムにより睡眠不足になりますか（英）？

A 複. よく寝ている等一斉に反応（英）。

Q4. サマータイム導入で地球温暖化に対する意識は変わりますか（日→英）？

A1. いいえあまり（英）。

A2. 普段はサマータイムとCO₂削減をあまり結びつけて考えない（英）。

A3. サマータイムは日照時間を長くするためであると考えている（英）。

Q5. 日本はサマータイムを導入した方がよいと思いますか（日）？

A1. 成功国も多いし日本で多くのサポートがあれば導入したらどうですか、国によって効果が違うのでよく考えたらよい（英）。

Q6. 温暖化についてどのような危機感がありますか（英）？

A1. 海面上昇、泳げないから（英）。

A2. 今年は出身地のロシアでもミシガンでも雪が少ない（英）。

A3. 温暖化が原因で氷が溶けることが怖い（英）。

A4. 海の塩分濃度が変わり生物が生きられなくなる（英）。

A5. 出身国のタイなどもともと暑いところがもっと暑くなると耐えきれない（英）

A6. 差し迫った問題は食糧ではないか（英）。

2. 8. 3 VC の成果と課題

次は、VC後に佐藤哲也氏から送っていただいたミシガン大生の日本語で書いた感想の一部である。例1はおもしろかった、例2はちょっとおもしろかった、例3はちょっとおもしろくなかった例である。これらは、主にVCの内容が理解できたかというコミュニケーションの視点から述べられている。このことから、難しいトピックであったこと、お互いのコミュニケーション能力の不足から会議の内容が十分に伝わってなかったことがわかる。討論はよかった、質疑応答は楽しかった、よい経験になった等の記述もみられ、VCについておおむね満足していると考えられる。

例1… 火曜日のテレカンファレンスはとてもおもしろかったと思います。三重大とミシガン大学の学生の発表は為になりました。でも、すごく難しいトピックだったので、ちょっとわかりませんでした。

三重大の学生の討論はとてもよかったと思います。たくさんよい考えがありました。ミシガン大学の学生もよい考えがあったけど、あまり話せませんでした。

来年は、もっとやさしいトピックを話した方がよいです。それをのぞけば、このテレカンファレンスはとてもよかった経験です。

例2… 火曜日のテレカンファレンスはちょっと面白かったと思います。日本の学生は面白い人だと思えますが、私たちは日本語があまり上手じゃなかったし、日本の学生の英語もあまり上手じゃなかったし、日本の学生と話すのはとても難しかったです。そしてテレカンファレンスのトピックはとても難しかったです。

それに本当は夏時間は地球温暖化と関係がないと思います。三重大の学生の発表は面白かったですが、ちょっとわかりませんでした。

最後に日本の学生に質問を聞いた時はちょっと楽しかったです。でも、発表はちょっとわからなかったの、質問を考えるのは難しかったです。テレビカンファレンスは面白いですが、みんなはもっと練習した方がよいです。

例3… このテレカンファレンスはちょっと面白くなかったです。その二つのグループはほかのグループ

の日本語と英語があまりわかりませんでした。三重大大学の学生のアクセントもちょっと強くて、分かりにくかったです。

トピックが違ったら、話すチャンスはもっとあったと思います。両方のグループは夏時間にあまり興味がなかったから、あまり話したくないみたいでした。だけど、日本とアメリカの生活とか文化の違いについて話し合ったら、面白くなったかもしれません。

講義終了後の社会科学学生の感想は次の通りである。ディベートや VC に関するものがほとんどであり、ディベートによる調べ、英語科学生との協同、VC を活用した地球的課題に関わる国際討論の導入についてはおおむね肯定的であることがわかる。

- 初めてのディベートをしてとても難しかったけれど勉強になりました。自分で調べること、人の意見を聞くことの大切さがわかりました。
- 地球温暖化について、英作をしたり、調べたり、ディベートをしたりと大変だったが、身につくものも多く充実していたと思う。
- YES と NO に分かれて、グループで議論する授業は、大学の講義ではあまりないので楽しかったです。
- ディベートの資料集めで、地球温暖化についての様々な取り組みや、いろいろな意見を知ることができた。
- グループワーク（ディベート）が特に強く印象に残りました。[VC 参加者]
- 議論することに慣れていないので、もっと練習ができればよかった。[VC 参加者]
- TV 会議は他の講義では見たこともなかったのでよかったと思う。
- TV 会議がとてもよい経験だった。[VC 参加者]
- TV 会議は楽しかった。[VC 参加者]
- TV 会議をやるならば、今度は全員参加にした方がよい。[VC 参加者]
- 日本にいながら外国人と交流できたことは本当に貴重な経験でした。他の英語科との協力などもあり、知識だけではなく大切なことが学べました。[VC 参加者]

VC により、三重大生とミシガン大生の両方とも地球的課題についての追究が深まった。また、社会科学生ばかりでなく英語科学生も積極的に参加し、コミュニケーション能力と思考力を育成することができた。

事前準備段階では、社会科と英語科の学生が、内容理解、英訳、表現の面で協力し、両学生の協同による地球的課題の考察が可能であることがわかった。

今回の VC では、資料提示の際に、教材提示装置によるスクリーンの情報をポリコムで映した（図 12 参照）。ミシガン大学側（図 13 参照）に資料を伝えることが可能であったが、今後、人物と資料を別々に伝える二画面活用を検討していく必要がある。関連して、社会科学学生はスピーチが中心で、あまり図表を使用しなかった。お互いが内容を理解するためには、わかりやすい図表を使用したスピーチが求められる。



図-12 三重大側の様子



図-13 ミシガン大側の様子

今回の VC は、トピックとテーマを三重大側が指定した。VC への積極的な参加の視点から、相手側とどのようなトピックなら議論できそうかを話し合って設定の方が望ましい。また、お互いが VC の流れを予測し、質疑を準備するために、事前にメール等で意見発表の概要を知らせておくことが必要である。ディベート形式の導入は、テーマに対する学生の深い追究がなされ、論点が明確になるという点で有効であった。しかし、ミシガン大生は長い時間一方的に聞く側になっていた。改善策として、設定したトピックのテーマに

ついて、お互いに意見発表を行う形式の導入が考えられる。

今後、お互いの協議のもとで設定したトピックについて、お互いに調査した上で、お互いの意見を提案し、お互いの疑問点を明らかにしていくことが望まれる。

2.9 Skypeによる反省会（2月8日）

Ozanich 氏、Stewar 氏と早瀬が Skype を使用して 9:00-10:00（アメリカ時間）、23:00-24:00（日本時間）の間、音声のみの反省会を行った。接続に全く問題はなく音声も始終クリアであった。話し合った反省と今後の課題については次項にまとめて述べる。

2.10 全体の振り返りと今後の課題

1月17日の遠隔授業を終えての、Ozanich 氏による「I think the video conferences this year were the best that we've had thus far.」という言葉からも分かるように、今年の遠隔授業は全体としては、多くの意見交換がなされたこと、お互いの学習言語を十分に使用できたこと、時間的ロスが少なかったこと等の理由で成功したと思われる。

同時に今後の課題として浮かび上がった点もいくつかあるので順番に述べたい。

- (1) 三重大生の小論文のトピックを決めるための学期草々の遠隔授業を次回は開催すること。（今年は計画したのにもかかわらず、三重大の施設が予約出来ず、実現しなかった。来年度は予定を早く決め、施設を確保することが肝心である。）
- (2) 個々の三重大生の毎回におけるサブトピックに関する発表内容は、多くの場合調査に基づく統計や情報が中心であったが、それに対してミシガン大からの返事は個人の意見であったりミシガン大やミシガンに限った内容であり、ズレが生じた。（ミシガン大生の個人的な意見やミシガンの様子は興味深い、一般性に欠ける。お互いの個人意見の比較、ミシガン大と三重大の比較、に絞ることもできる。もし、調査が必要な場合は前もってミシガン生に知らせることが出来れば良いが、現在のミシガン大生のボランティア参加システムでは難しいと思われる。）
- (3) 時間配分に、より忠実になり英語と日本語の使用を最大限になるように努力する必要がある。特に英語の部において、個々の三重大生からの質問の数と、それに対するミシガン大生の回答者の数を限定することが肝心であろう。また、来年三重大生が多すぎれば、ペア・作文でも良い。
- (4) ミシガン大生の英語が分かりにくい場合もあり、

又、メモが取れないことがあるので、それぞれの遠隔授業の後、普通教室で再度ビデオで振り返りながら、内容の確認、遠隔授業の反省ができると良いが、時間割の関係で無理である。（次回の通常授業で、課題のあるところだけを見ながらの反省でも効果があると思われる。）

- (5) ミシガンのカメラ移動はなぜ速い理由はリモコンの pre-set button 利用であると分かったので三重大も取り得たい。
- (6) 学生のメールアドレスを交換したのは良かった。何人かがメールで回答を得た。また、むこうから積極的なメールが早瀬に1通あった。
- (7) 来年度 debate を行う場合は日本語のレベルの高い学生が好ましい。また、内容について事前に綿密な打ち合わせをすること。
- (8) 三重大側は机の配置を考える。ミシガン大のように椅子だけで囲む。メモ用にはボードを全員が用意する。名札の置き場所はないが、最初だけ見せても良い。さらに、マイクロフォンを中央に固定して動かさないことも大切である。（動かすと先方にノイズが入るため。）日本人は概してアメリカ人に比べ声が小さいので、より大きく話すよう指導も必要である。やはり、最後は、通常授業を、1回、まとめ、振り返り、作文提出の確認等も含め、行ったほうが良い。
- (9) ミシガン大学の課題は、実際の授業とどのように融合していくかである。（現在は授業に無関係で、日本語を練習する目的でボランティアの学生が参加している。）そのため、日本語の先生にもっと積極的に参加してもらうよう努力する。
- (10) 来年度も、合計5回の遠隔授業をすることに決定した。又、授業以外に、お互いの話す量を増すため、日米学生同士でペアを作り、Skype 等で個人対話をさせたほうが良い。

II. ノースキャロライナ大学との作文交換授業を振り返って

1. はじめに

2006 年度後期、三重大学教育学部英作文Ⅱ（荒尾浩子助教授担当）の授業において、米国ノースキャロライナ大学ウェルントン校（UNCW）の中級日本語Ⅰ（加納洋子講師担当）との作文交換を行った。本稿では、その実践を報告し、振り返りを行う。

2. 作文交換の予定

後期の 10 月～11 月の 2 ヶ月間、計 5 回に亘り、日本人学生は英作文、アメリカ人学生は日本語作文を送り合い、読んで訂正やアドバイス、コメントを書いて送り返すことを行った。UNCW 側が WebCT にて作成した FORUM と名付けられた掲示板に互いの作文を添付して送るという方法をとった。そのため、授業開始前に UNCW 側に英作文Ⅱの受講予定者の氏名を連絡し、アカウントを作成してもらった。その後、すでに 9 月より開講している中級日本語Ⅰで、10 月に取り組む予定の作文のトピックを教えてもらい、英作文Ⅱの 5 回分のタイトルとを決定し予定を立てた。日本人学生は、英作文Ⅱのほうで、パラグラフィティングの練習をしており、英作文Ⅱではエッセイライティングを訓練した。三重大学側のスケジュールとしては以下のようであった。

作文の交換にあたっては、日本人学生とアメリカ人学生が、毎週ローテーションでパートナーを組み互いに、交換をする方法をとった。UNCW の受講生 6 名に対して、日本人学生は 19 名いたため、アメリカ人学生 1 人につき 3 人の日本人学生の英作文を受け持った。日本人学生は、反対に 3 人各々が 1 人のアメリカ人学生の日本語作文を担当した。毎回のパートナーの組み合わせは、UNCW 側が設置した Web 上に載せられた。

自己紹介

アメリカ人学生は自己紹介を Web 上にアップし、顔写真と共に、日本語と英語の両方を併記した。その中の数人は音声ファイルもつけた自己紹介を行い、日本人学生は声も聞くことができた。一方、日本人学生はこれから使用する FORUM の掲示板に投稿する練習を兼ねて自己紹介を投稿した。また顔写真を添付し、開いて見られるようにした。音声ファイルについては時間的な余裕がなく作成できなかった。

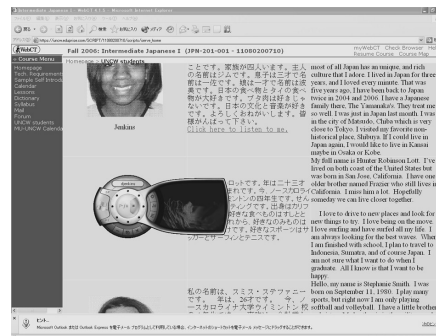
Oct. 12	Write self-introduction in Forum
by Oct18.	Turn in "My favorite season" to UNCW.
Oct. 19	Read and correct "Seasons and leisure activities" and send it back..
by Oct 25	Turn in "Popular leisure activities in Japan" to UNCW.
Oct 26.	Read and correct "Writing (Step3)"
by Nov. 1	Turn in "What is trendy in Japan now?" to UNCW.
Nov. 9	Read and correct "Grand Father, Father, & Elder brother" and send it back
by Nov. 15.	Turn in "My family" to UNCW.
Nov. 16	Read and correct "Grand Father, Father, & Elder brother" and send it back.
by Nov. 29	Turn in "Family problem in Japan" to UNCW.
Nov. 30	Read and correct "Mother".

アメリカ人学生の自己紹介

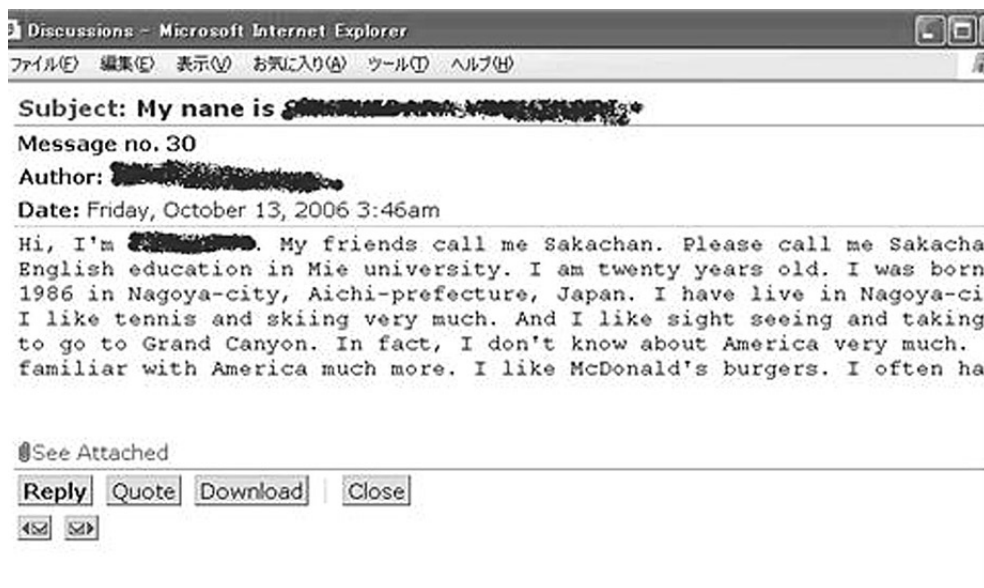
はじめまして。私の名前は・・・です。出身はアメリカのペンシルベニアです。でも国はアメリカのノースカロライナです。私は三年生です。私の専攻はコンピュータ・サイエンスです。年は二十歳です。私の生まれは 1986 年の五日です。寿司が好きです。そして酒とミルクが好きです。眠るのが好きです。宿題が大嫌いです。どうぞよろしく。

Hello. This is I am 20 years old and live in an apartment in Wilmington, North Carolina. I have two roommates, Shannon and Steven. I love anime, video games, and sleeping. Food wise, I like sushi, lamb, rice, and french fries. This is my third year at this university and I am enjoying it very much. My birthday is June fifth and thus I am a gemini. My nationality is English. Thanks for reading this.

音声付自己紹介の画面



日本人学生の自己紹介の画面（顔写真は添付した）



3. 作文交換実施

3.1 第一回目

日本人学生は "My favorite season" の題で、自分の好きな季節についてその描写や理由の説明などを書いた。アメリカ人学生の英作文へのアドバイスは、とても丁寧、親切で、助けとなる内容であった。直し方の特徴として、1. 日本語的発想によって書いたものを英語的発想に書き換える。2. より英語として洗練された言い回しに書き換える。3. 文法的に正確にする。4. 英語として自然な言い回しに書き換える、等があった。以下は実際の日本人学生が書いた英語のエッセイの一部でカッコ内は、アメリカ人学生の訂正、助言したものである。

日本人学生の英語エッセイの一部とアメリカ人学生の訂正、助言の例

My favorite season

Japan has four seasons, which are clearly defined. Of course I like them all, but especially I like autumn the best ("the best" is not necessary).

In autumn, many schools hold a school festival. There are a lot of booths, for example (It would sound better as "There are many booths such as those for"), *yakisoba*, *okonomiyaki* and *yakitori*. You can also eat sweets there. They are cheap and delicious and buying foods (no 's' needed, it doesn't need to be plural there) at such (a) booth is fun. They also hold a school sports. Students enter many competitions and compete with rivals and the others cheer for them. I love to watch them trying hard for the victory (how about, 'I love to watch them strive to win.'?). Through these events, the whole school gets lively.

People often say, "autumn eating" (* smile * I don't

think that English has such a saying. But what about, 'In Japan, there is a saying, "people eat more in autumn"'. Would this work better for you? Or does what I put deviate too far from the original saying.). It ('This') is because autumn is the season when foods are rich and we have a good appetite. There are lots of foods that are in season (perhaps, "There are many foods in season.'). My most favorite autumn food is sanma grilled with salt. It goes well with beer. There is a popular autumn rice dish with ('made by' rather than "with") adding seasonal ingredients such as chestnuts, matsutake mushrooms and salmons.

アメリカ人学生が送ってきた作文のタイトルは "Season and leisure activities" であったのだが、エッセイではなく作文の練習問題が送られてきたので、文法の訂正となった。日本人学生は、直接訂正を書き込んで送って者もいれば、コメントと変更履歴を使用して送ったものもいた。

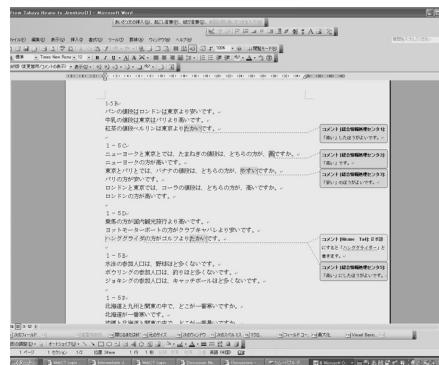
アメリカ人学生の作文練習問題

パンの値段はロンドンでは東京より安いです。

牛乳の値段は東京はパリより高いです。

紅茶の値段ベルリンは東京よりたかいです。

日本人学生のコメントと変更履歴による訂正



日本人学生が文法的な訂正を行う際には、文法説明をしないようにとあらかじめ注意した。というのも、日本語教授法を専門的に学んでいるわけではないので、アメリカ人学生が授業で習っている説明と違う説明をしたり、不適切な説明をした場合、混乱する可能性があるからである。よって正しく直すことのみが求められる比較的簡単な作業であった。しかし内容的には、日本語の単文の羅列だったので読んで楽しむことはできなかった。

3.2 第二回目

日本人学生は、"Popular leisure activities" という題でエッセイを書いた。内容は多様であったが、日本の四季ごとに人々が楽しむ花見や紅葉見物、スポーツ、海外旅行、また学生の間で人気のボーリングやカラオケなどについて書いたものが多かった。それに対してアメリカ人学生は、第一回目同様に、丁寧に訂正、助言を与えた。中には、日本人学生がエッセイの終わり部分に、次のように相手の国のレジャーについて "Please tell me about your country's leisure activity." と投げかけたところ、エッセイの訂正と共に以下のように、返答をくれたアメリカ人学生がいた。

There are many activities that one can enjoy here in America. Playing sports, such as basketball, baseball, ultimate Frisbee, football, soccer, and lacrosse are some of the more agile type activities. Reading, relaxing in a hammock or at a beach are some others. There are many regional leisurely activities, as well. Rock climbing, hiking, camping, and white water rafting are all for those who like to be one with nature. Others like to go shopping, gardening, go to sporting events, building cars or other crafts. The activities really depend upon the person, where they live, and their personal interests.

このように訂正だけでなくトピックに関しての情報交換があり、英語だけではなくアメリカの文化事情を学ぶのによい機会となった。

一方、アメリカ人の日本語作文は、今回は、主に vacation に関するエッセイを送ってきた。アメリカ人学生の中には日本へ旅行した経験がありそのことを綴ったものや、日本でやってみたいことなどが書かれてあった。漢字の送り仮名や、文法的間違いを中心に日本人学生は直したが、中には次のような勘違いもあり、それについての文化情報を日本人が与えることもあった。

私はレストランに行って、おにぎり食べてみたいです。

コメント：There is no grammatical mistake, but we usually buy rice balls at the convenience store.

アメリカ人学生の日本への旅行については、京都、大阪、東京、静岡と各地をめぐる、そこでの食べ物やお土産の話などが満載であり、日本人学生以上に日本国内をよく旅行し、観光を楽しんでいる様子うかがえた。またいかに日本に対する興味が高いかも伝わってきて日本人学生を感心させた。

3.3 第3回目

日本人学生は "What is trendy in Japan now?" というタイトルでエッセイを書いた。日本で流行している物については、学生は敏感であり精通しているであろうことと、アメリカ人学生にとっても興味深いのではないかという理由で設定した。学生達が選んだ流行のものは多種多様であり、携帯小型電子ゲーム、アイドルタレント、携帯電話番号ポータビリティサービス、ブログ、お菓子、ラーメン等、個々の解説や思い入れについて書いた。内容的には、今回のトピックは各々の興味のあることを選ぶことができたこともあり一番充実しているようにうかがえた。

日本人学生の英語エッセイの一部とアメリカ人学生の訂正、助言の例

NintendoDS

In Japan, NintendoDS is very (popular. Especially, NintendoDS Lite is very hot.... change to "popular, especially the Nintendo DS Lite.) (The DS) Lite is very small, so we can go anywhere with it. (And color variation is rich.. suggest" and the picture is very rich in color). Beside (s), we can watch two big screens, (use a) touch screen (by... "with a") pen, and communicate with the other (that live remotely... remove this). (This is...change to ", which is") very excellent.

一方、アメリカ人学生は、今回はエッセイではなく練習問題であった。関係詞句に下線を引き修飾されている語をカッコで囲み、英語訳を書くというものであった。日本人学生にとっては、やや退屈な作業となった。

例 1. あそこでテレビをみている (女の子) は、私の妹です。

That girl watching television is my little sister.

3.4 第4回目

"My family" というタイトルで日本人学生はエッセイを書いた。多くは自分の家族構成を書き、それぞれの家族一人ひとりの暮らしぶりや性格などを描写した。そして自分と彼らの関係や共通の時間の過ごし方などについても触れた。内容的に平易であったため、書くのは比較的簡単であったのではないと思われる。

アメリカ人学生は、"Grand father, father & Elder brother" というタイトルで自分たちの家族についてエッセイを書いた。単調な日本語作文の練習とは違い、また個人的な内容のためかモデルがないようで日本語能力のバラつきが目立った。以下は、日本人がかなり苦勞して読んだものの一部である。

アメリカ人学生の日本語エッセイの例

私はあにおあって、あにの名前はポリオンです。ポリオンさんは空軍士官学校に行ったことがあります。空軍士官学校はコロラドにあります。今パイロットトレーニングしています。あたらしくるま買うたがっています。すきはえいがおみたり、ばすけとバールおしたり、うんどうおしたりします。私はあにのにぎやかくて、よくて、しずかです。私は父おあって、父の名前はチムです。父は大学おはたらくです。すきはさんばおしたり、うんどうおしたり、レスリングおしたりします。軍隊はしごとあったことがあります。父はきびしくて、いそがしくて、おもしろいです。

しかしながら、自分たちの英語エッセイを毎回アメリカ人学生がとても丁寧に見てくれていることもあり、どの学生も根気よく直し送り返していた。苦勞した時こそ、作文交換の良さの一つとして“お互い様”を実感できる。

3.5 第5回目

今回が作文交換の最終である。日本人側のタイトルは "Family problem in Japan" であった。前回、自分の家族の話を書き、アメリカ人学生の家族のエッセイも読んだので、少しテーマを広げて社会的問題について書くことにした。こういった話題は自分の主観だけでなく事実の考察に基づくため、ライティングとして難易度は高いと思われるが、エッセイライティングの5回目としてはこの程度の手ごたえのあるものに取り組むことが望ましいと思われた。日本人学生がトピックとしてあげたものの例としては、核家族、幼児・児童虐待、子供の個食、家族関係、少子化といったものが中心であった。教育学部の学生だけあって、子供の成長や生活からの視線で議論を深めているものが多く、充実した内容であった。

日本人学生の英語エッセイの一部とアメリカ人学生の訂正、助言の例

Family problems

There are (some... "all sorts of") family problems. (Of late... "In recent" years, the news often (says... "talks of") child abuse. Also, I often (listen to... "hear of" incidents) that children murder their parents. I wonder (that... "why") such things happen. Here, I will talk about child abuse.

またエッセイの後の部分に以下のようなコメントをつけてくれるアメリカ人学生もあり、励みとなった。

The short essay has a great flow to it. Just a few minor mishaps. Great job on it. I feel the same way about child abuse. There's no need for any child abuse even if the kid is severely misbehaving. A stern hand and reprimand is good enough. Keep up the good work.

一方、アメリカ人学生のほうは、“Mother” というタイトルで自らの母親について日本語でエッセイを書いた。単純な内容とはいえ、先回と同様、エッセイとなるとかなり間違いが目立ったが、言わんとしてることはわかるので、日本人学生も時には笑ってしまうことがありながらも一生懸命訂正した。文中にも訂正を入れたが、あまりにも見つらなくなったため、丁寧に全文をつけて直したこともあった。

アメリカ人学生のエッセイの例

私の母が面白くて若く見えるで魂が二十歳見たいです。彼女が本当は 67 歳です。私の母は踊りを好きで孫さんに遊んですることが一番に大好きと思います。母の趣味は近所の人にせわにします。私は一番下の子で二人でいつも借り物したり、いっぱいはなしたり、いつも遊んでばかりでした。もし問題がある母に相談します、何でも母が聞きやすいです。

日本人学生の手訂正の例

私の母は面白くて若く見えるので、心は二十歳みたいです。彼女は本当は 67 歳です。母は踊りが好きで、孫と遊んで踊ることが大好きだと思います。母の趣味は近所の人のお世話をすることです。私は一番下の子なので二人でいつも買い物したり、いっぱいはなしたり、いつも遊んでばかりでした。もし問題がある時は母に相談します。何でも母に聞きやすいです。

4. 終わりに

2 ヶ月間、5 回に亘る作文の交換は、このように実施し、終わりを迎えた。わずか 5 回のやりとりであるが、毎週のようにスケジュールに従い遅れないようにエッセイを仕上げ相手に送り、また相手の作文を受け取り読み、訂正し送り返す作業の繰り返しは、集中的で緊張感を伴う作業であった。しかしながら、どの学生も自分の作文が訂正され戻ってきているファイルを Web 上の掲示板に見つけると非常に喜び、楽しみにして開いて読んでいた。やはりこういった作文の授業では必ず読んでもらう相手が必要であり、それが自分と同じく外国語を学習しているネイティブスピーカーであるというのは書く上で励みになることであると思

われる。アメリカ人学生は、不自然で不正確な日本人学生の英語エッセイを、親切、丁寧に訂正、助言をして送り返してくれ、日本人学生は大変感謝した。また授業担当者としても日本人の指導者では思いつかないような英語表現を提案してもらい大変勉強になることも多かった。

相手の日本語の作文を読み訂正する作業も日本語文法を客観的にながめ慎重に取り組むことができた。かなり読みづらい日本語も前後の関係から意味をくみ取り、訂正した。ある程度の忍耐と根気強さが必要であったが、アメリカ人の日本語の作文を読むことは楽しいことであったようだ。

しかしながら、今回の取り組みでいくつかの問題点も浮き彫りとなった。まず一番の問題としては、日本人学生の英語書記能力とアメリカ人学生の日本語書記能力の差であった。日本人学生の英語もまだまだではあるが、中学、高校、そして大学での英作文 I とある程度の訓練は受けており、一定のレベルには達していた。しかしアメリカ人学生に関しては、学生間の能力にバラつきがかなりあった。特にエッセイの内容に関して、あまり深みがあり情報量が豊富なものは期待できなかった。また 5 回のうち、練習問題をやって送ってきた時は、単なる日本語の添削となってしまう日本人学生には興味あまり持てなかった。

学生数の不均衡さも問題であった。日本人側が 19 名に対して、アメリカ人側は 6 名であった。よってアメリカ人学生は一人で 3 人位の日本人のエッセイを毎回担当しなくてはならず、負担が大きかったに違いない。アメリカ人学生の受講生は途中でドロップアウトがあったのか不明であるが、日本語作文を期限までに送ってこなかった者もいた。そうすると担当の日本人学生の中でも、週によって何も読まないで終わる者と、きちんと読んで訂正しなくてはいけない者とでてくることになり作業の負担に不平等がでてしまった。

今後の課題としては、音声ファイルの作成がある。途中の段階で、UNCW の加納先生の側から、作文を音声ファイルにして送ったものを聞いて訂正して送り返すのはどうかという提案があった。自己紹介にアメリカ人学生は音声を付けてきており、とても興味深かった。しかしこちら側が録音する作業を英作文の授業内で行ったことがないため急に準備ができず、今回は見送ることとなった。音声を伴った作文はアイデアとして大変おもしろく、音声学習として非常に効果的であると思われる。今後は録音して相手に聞いてもらうという作業も取り組みに入れていくことを前向きに検討したい。



お互いに外国語を学習する学生同士、作文を交換しフィードバックする実践は今後も機会があれば是非続けていきたいが、今回あがった問題をできるだけ最小限にするために事前の打ち合わせがもっと必要であると思われる。今回の実践では、なるべくお互いの作文のタイトルを近づける努力をしたがやはりレベルの違いもあり、トピックを完全に共有することができなかった。全く同じタイトルで同じトピックについて書き合ったほうが、お互いのアイディアを交換し内容にも、深みを持たせることができたはずである。受講者数の不

均衡など、解決したい問題は別として最低限、レベルが等しい学生同士でやりとりできることが望ましい。もしそれが不可能であった場合は、母国語を使用してでも意見の交換ができるようなやりとりをどこかで取り入れて補う必要があるであろう。

注

- i 次の文献を参照のこと。荒尾浩子・早瀬光秋(2006)「アメリカの大学との遠隔授業を振り返って」三重大学共通教育機構 大学教育研究--三重大学授業研究交流誌-14, 29-44.
- ii ポリコムとは、1990年に設立された米国の Plycom Inc. (<http://www.polycom.com/home/>) によるテレビ会議システムであり、主に本体、カメラ、スピーカー及びマイクフォンを含み、それを双方の IP アドレスを利用してインターネット回線とテレビ受像器に接続するものである。画像は鮮明で音声も時間的ズレがなくクリアである。